

病む妻へ

末国正志

広島県・四〇・無職

入院中のあなたと失業中の僕と……こんな日々が来るなんて、ついこの間まで考えもしませんでした。体の不安を抱えていたあなただけれど、病に倒れる原因となったのは、僕の失業であったとはっきり感じています。あなたのところにのしかかった大きな不安、それは、僕が思う以上のものだったのですね。

僕にいまできることは、あなたが毎日していた家事のわか代行と、あとはあなたに毎日会いにゆくことだけです。あなたが、同じ病室のおばちゃんに失業の身の上を話してから、毎日会いにゆく恥ずかしさもなくなりました。

「今日ご主人遅いね」って言われたなんて、きっと欠かさずやって来ると思われているんですね。でも、そのとおりだけどね。

ふり返ってみれば結婚以来一六年、大きな心配ごともなく暮らしてきたのですね。その日々に比べれば、いまは心配ばかりの毎日です。明日が見えない、その不安があ

なたの病気を長引かせてしまうのが気にかかります。

でもあなたが言うように、普通の体ならば仕事はできるのです。働けるところを必死に捜すしかありません。あなたが入院してもう三週間が過ぎました。毎日毎日好天が近づきますね。「いくら晴れても空しい」なんて言いながら、このごろは笑顔も多くなりました。予期しない出来事で、人生の苦境にいると思うけれど、でもふと、こういうふうにも感じています。いまは、ふたりで充分話し合えばいいと、天が与えてくれた時間なのだろうと。

きつとよくなることを信じています。苦しいけれど病室の窓辺でふたり、ゆく末を何度も何度も話し合った時間を、いつかあなたかく思い返せるときがくると信じています。一〇〇思っ、一〇叶う、といいます。でもいまは、ただひとつが叶うようにただひとつを願うだけです。

あなたが元気になりますように、と。